

## プレビッシュ博士を偲ぶ

著者	細野 昭雄
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	3
号	3
ページ	13-18
発行年	1986-09-20
出版者	アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006718">http://hdl.handle.net/2344/00006718</a>

# プレビッシュ博士を偲ぶ

細 野 昭 雄

1

ラウル・プレビッシュ博士は去る4月29日チリのサンチアゴで逝去された。85歳であった。まったく突然の出来事であり、オタワ大学、エール大学およびニューヨークの国連本部で演説をし、そしてメキシコ市での第21回国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会（ECLAC）総会で、彼にとって最後のスピーチを行なってチリに戻ってきた直後であった。カナダで風邪をひいたのが原因で、心臓発作のために亡くなったと報じられている。

プレビッシュ博士の葬儀は、ブエノスアイレスとサンチアゴの2カ所で行なわれた。ブエノスアイレスでは5月15日、アルゼンチンのラウル・アルフォンシン大統領自らがサン・マルティン宮殿で追悼演説を行なった。

サンチアゴではECLAC本部において、4月30日に追悼の式が行なわれ、プレビッシュ夫人とラウル・プレビッシュ二世も参加した。この葬儀ではチリのシルバ・エンリケス枢機卿がミサを行なった。火葬に付され、その灰の一部がECLACの庭園に埋められ、ラウル・プレビッシュ二世によって植樹が行なわれた。またアルフォンシン大統領の代理としてエンリケ・ガルシア・バスケス同大統領顧問（前中央銀行総裁）が列席して追悼演説を行ない、ノルベルト・ゴンサレス氏等の演説が行なわれ、国連事務総長等からのメッセージも読み上げられた。

2

プレビッシュ博士逝くの報は、私にとってまったく信じがたいものであった。3週間前にサンチアゴでお会いしたばかりであり、その時の元気な様子からは思いもよらなかったことだからである。

それは、4月の初めにECLACの事務局を訪れた時のことであった。当日ECLACでは、私が日本の経済発展と今後のラテンアメリカと日本の協力に関して報告をするセミナーが開催されることとなっていたが、その会場に行く途中でプレビッシュ博士に偶然出会った。博士はあなたの話しは残念ながら聞きにいけないが、今日の夕方にも私の部屋に話しにきませんかといわれたのである。この日が私にとってプレビッシュ博士と話しのできる最後の機会となってしまったのであった。

ECLACにおける彼の部屋は中央の建物の正面左側の一番端の大きな一角を占めている。その部屋は二面がガラス張りとなっており、丸い大きな噴水のある人口池と、花の多い庭園、そしてECLAC加盟国の旗のはためくポールを見わたすことができる。中央には、カリブ海の加盟国から贈られたどっしりした大きな木の机が置かれている。ECLAC勤務時代の私の部屋は、ここからわずか三室隔てた所にあった。それでプレビッシュ博士とはよく廊下などで顔を会わせ立ち話をし、そのまま部屋に招かれて話しを続けることなども少なくなかった。

当日は、私にその日一日同行して下さった在チ



ありし日のプレビッシュ博士と筆者  
(CEPALテクニカにて、1985年)

り日本大使館の杉田書記官と彼の部屋を訪れた。久しぶりに例の大きな机を隔ててプレビッシュ博士と向かいあい、ECLAC勤務時代に戻ったような錯覚に陥った。当時からすでに約10年の月日を隔てているのに、その時間を感じさせないほどプレビッシュ博士はお元気であり、雄弁であった。

話は博士が最近強い関心を抱いている経済発展における国家の役割、特に市場メカニズムの働きを有効に生かしつつ国家の役割をどのように効果的に実現させるかというテーマについての意見交換となった。博士は、特に日本ではそれが成功しておりそれが実際にはどのように行なわれたのか、なぜ成功したのかを是非とも知りたい、日本の経験を分析してほしいといわれるのであった。

実は、このことについては、すでに昨年10月にお会いした時にも強調されたことであった。その時はブエノスアイレスのホテル・プラサで大来佐武郎先生のプレビッシュ博士との会談に同席させていただいたが、その後お宅まで博士をお送りした時、話したいことがあるから是非昼食をしていけと強くすすめられ、お昼をいただきながらの懇談となった。この時に時間をかけても構わないから、日本における経済発展と国家の役割について研究をし、論文を書くようにといわれた。そし

て、なぜそのことに関心があるのかを詳細に述べられたのであった。その内容は基本的には、同年の5月に行なわれたECLAC主催の「ラテンアメリカの危機と発展に関する専門家会議」（通称、CEPALテクニカ）でのプレビッシュ博士の考え方を敷衍したものであった（このことについてはアジア経済研究所から刊行予定の『ラテンアメリカの危機と発展』（小坂・細野・加賀美訳）の解説のところで述べた）。この昨年5月と10月、今年4月の3回にわたる博士との対話のなかで、私自身も大いに示唆されるところがあった。

### 3

プレビッシュ博士は、人との対話を大切にされる方であった。4月30日に行なわれた追悼演説のなかで、アドルフォ・グリエル氏はプレビッシュ博士の考えとして、次のようなことを言っている。博士は「自分の考えと一致しない人は決して敵ではなく、単にこちらが説得し得るか、あるいは説得されるかのどちらかの、一時的な論争相手にすぎない」と見ており、それゆえに対話を重視したのだと。その考え方に立ってプレビッシュ博士は、あらゆる機会を通じてECLACのなかの人々はもとより、ラテンアメリカの多くの人々と対話を続けたのであった。

この態度は、たとえば1976年に博士の編集によってはじめられた *CEPAL Review* において彼が発表した、周辺資本主義に関する一連の論文をめぐっても見られる。博士は自分の論文について、多くの人々に意見を求め、その意見がいかに批判的なものであろうとも、それを受け入れて *CEPAL Review* に掲載したのである。その一部はメキシコから『周辺資本主義批判』（*Crítica al Capitalismo Periférico*）として出版されたが、その

後もこの分野での対話を継続した。しかし、博士は、その内容にまだまだ満足できないと言われ、さらに時間をかけて最終的な著書にしようと思われていたようである。実は『周辺資本主義批判』を日本語に翻訳するという話があり、本が出版された直後ワシントンでお会いした時に、その承諾をお願いしたのであるが、博士は日本語への翻訳はうれしいが、今本当に満足できるスペイン語のものをまず書き、それを翻訳してほしいので今すこし待ってほしいとのことであった。英語や中国語に翻訳する話もあるが、同じようにお答えしているのだとのことであった。プレビッシュ博士は、その後も対話を続けつつ研究を完成しようとしているようであった。4月にお会いした時もそのことを気にしておられ、「アルゼンチン経済に関する大統領顧問として、ここ2年間は非常に多忙であり、そのために本の方はあまり進めることができなかった。今アルゼンチン経済については、自分としての一つのまとめとして本をようやく書き終わったところである。これから再び周辺資本主義の問題に戻ってゆきたい」と言っておられた。

対話ということでは、私自身にも次のような思い出がある。1974年のことであったが、第一次オイルショックが発生し、国連ではオイルショックによって最も深刻な影響を受けた国（MSAC）に対して、救済するための基金を設けることが決議された。国連事務総長は、その基金の拠出を要請するための特使としてプレビッシュ博士を任命したのである。この時の日本訪問に際しては国連本部から急ぎ連絡があり、はからずも私がお供することとなった。日本滞在は4、5日であったと記憶しているが、この時はホテル・オークラの隣り合った部屋に泊まり4日間行動を共にし、プレビッシュ博士により身近かに接する貴重な機会と

なった。その時に最も印象に残っているのが、博士との対話であった。博士は自分の健康法は歩くことであるといわれ、時間ができるとホテルの庭や廊下を散歩されるのであった。その際にただ歩くだけではなく、私に沢山の質問を浴びせられ、はじめはまるで試験をされているかのようであった。その質問は日本の経済や社会全般に関することから理論的なことにまで及んだ。最初は勢いに圧倒され質問にお答えするだけであったが、後半になると私の方からいろいろな質問をさせていただいた。博士は、その一つ一つに丁寧に回答され、大いに感銘を受けた。この時の対話がその後一つの論文に発展した。それはプレビッシュ博士が間もなく *CEPAL Review* の刊行を計画し、編集を担当されることとなったからである。その第1号は1年半後に出版されたが、博士は私に対しあの議論を基にして、日本の経済発展とラテンアメリカの開発戦略について書けと盛んに言われたのであった。そして、そのなかで工業化と雇用の問題に焦点を絞るようにいわれた。私はもっと勉強してからでないととお断わりしたが、それでも、とにかく論文にまとめ、それを見ていただくことをお約束した。論文の内容にはまったく自信がなかったが、それを博士は詳細に見て下さり多くのコメントをいただいた。そのコメントをもとに修正を加えて結局 *CEPAL Review* の第2号にその論文が載ることとなり、私にとっては忘れられぬ思い出となった。

こうした形でプレビッシュ博士は、ラテンアメリカ内外の多くの人々に接し、その長い生涯にわたって指導を続けてこられた。特にラテンアメリカではプレビッシュ博士の影響を直接受けた人々が政治家となって活躍したり、また研究者となって、新たな理論を展開して、その思想を広めたりしている。また博士は多くの著書や論文、彼の名

前の出ない国連の文書等を通じて強い影響を与えた。

この意味でアントニオ・オルティス・メナ米州開発銀行総裁の追悼メッセージの次のような言葉は誇張ではないだろう。「ラテンアメリカで彼の影響を受けなかった国はなく、また最近の40年間において活躍したラテンアメリカの人誰もが、プレビッシュ博士と何んらかのコンタクトを持ち、プレビッシュ博士から何んらかの影響を受けた」。

とりわけ、ECLACにおいて彼の影響が最も強かったことは言うまでもない。ECLACに勤務する者は、学歴の如何を問わず、すべてセニョールで呼び合うことが習慣となっているが、プレビッシュ博士だけが例外であった。彼は常にドクトール・プレビッシュと呼ばれた。博士はドクトールという称号を持ってECLACの内部で呼ばれる唯一の人であった。この一事をもってしてもECLACにおけるプレビッシュ博士の位置がわかるであろう。ノルベルト・ゴンサレスECLAC事務局長がその追悼演説で述べたように、プレビッシュ博士はECLACの事実上の創設者であり、またラテンアメリカ社会経済計画研修所(ILPES)および国連貿易開発会議(UNCTAD)を創設した人であったが、「彼は単にこれらの組織を創り上げただけでなく、それに魂を入れた人であった」。特にECLACにおいてはそうであった。このことについてゴンサレス氏はまた次のようにも述べている。「ECLACは常に愛され尊敬されたこの師のものであり続けるであろう。ECLACの職員一人一人はそこに所属したという誇りを持ち続けるであろう。その誇りは基本的にはプレビッシュ博士が切り開いてこられた道のおかげなのである」。さらにゴンサレス氏は、プレビッシュ博士の対話にも言及し、次のように続けている。「われわれはプレビッシュ博士が遺産として残したバイタリティー、学

識者としての誠実さ、ならびに実りある対話を模索することを受けつぐという責任を負っている。そして、われわれは、われわれ自身を常に革新していくことを課題としなければならない」。

#### 4

プレビッシュ博士の影響は、上記のようにラテンアメリカにおいて非常に強いが、それはUNCTAD開催を機に広く世界全体におよぶものとなった。実際、南と北との本格的な対話ないし交渉がはじめて実現したのは1964年の第1回UNCTADにおいてであったが、会議の準備事務局長としてその実現に尽力し、会議を成功させ、さらに初代のUNCTAD事務局長として、同事務局の基礎を築いた功績は大きい。もっとも第1回UNCTADは必ずしもプレビッシュ博士の期待したとおりに進まなかった。会議のために準備された国連文書は、プレビッシュ報告と呼ばれ、その独特の考え方や提案が明瞭に示されているが、商品協定や途上国からの製品輸入に対する特惠などに対しては、先進国の多くが反対したのである。ガルシア・バスケス氏が追悼演説で述べたように、「この会議こそは、あらゆる民族と人種の参加した、かつ最も多数のしかも異質の人々の参加した国際会議であった」。しかしそれだけに異なる利害の、特に南北間の調整が非常に困難であった。数のうえで南が北をおしきって、決議を採択しても、北側の留保付きとなれば、決議の実質的意味は大きくそこなわれるからである。プレビッシュ博士は調整のために文字どおり奔走した。それでも先進国からの譲歩のえられないことが多かった。このとき彼は、「今日の幻想は10年後には現実となるであろう」と言った。実際、たとえば徹底的に米国が反対していた特惠も、その後各国が相次いで実

施にふみきり、米国自身も実施した。プレビッシュ博士が、先に述べた基金の拠出を要請するために訪日した時、木村俊夫外相は彼に、「10年後の今日、あなたの言われたとおりになりましたね」と言われたが、プレビッシュ博士が黙ってうなずいていた様子が思い出される。これはプレビッシュ・レポートと彼の提案が、南北対話が事実上はじめて実現した当時としてはいかに画期的なものであったかを物語っていると同時に、博士の洞察力の鋭さを示すものであろう。

しかし、1964年当時は、まだラテンアメリカ域外では、プレビッシュ博士を知る人は少なかった。わが国でも、ほとんど知られていなかった。私事にわたり恐縮であるが、1962年にアジア経済研究所に入所した私は、同年に設置されたラテンアメリカ調査室でアルゼンチン研究を行なうよう指示された。これが私にとっては、プレビッシュ博士との出会いを意味した。どこからアルゼンチン研究をはじめてよいのか見当もつかなかった私は、とにかくアルゼンチンに関する本や論文を手当たり次第読んでいったが、そのなかでプレビッシュが重要そうだということに気がついたのである。翌年には彼がUNCTAD準備事務局長となったことを知り、同期生の原口武彦氏と、プレビッシュとUNCTADの研究を、研究テーマとして認めてもらうことを提案したこともあった。それは実現しなかったが、個人的に研究することとし、2年後「プレビッシュの経済思想」（『アジア経済』第6巻第3号 1965年3月）と「プレビッシュ理論の核心と意義」（『国際経済』＜国際経済学会＞第16号 1965年）の2論文にまとめた。これがきっかけとなって、私は、プレビッシュ博士が長くいられた、ECLACで研究することを決心した。そこではプレビッシュ博士が集め、その指導のもとで研究をした多くの人々との交流が広がり、私にとっては

ラテンアメリカ研究の新しい世界が開けていった。ECLACでの滞在は約11年にも及ぶこととなってしまったが、プレビッシュ博士との出会いがなかったら私はこうした道を歩まなかったかも知れない。

## 5

以上、ラテンアメリカの内外でのプレビッシュ博士について回想してきたが、生まれた国アルゼンチンにおいても、博士は少なくとも3回にわたって重要な役割を果たしている。

第1は中央銀行の初代総裁としてであり、1935年34歳の若さで就任している。ガルシア・パスケス氏によれば、そこで「プレビッシュ博士は、その政治家としての、かつ、異例のオーガナイザーとしての才能を確立した」のである。「そして国の諸問題についての研究を推進し、中央銀行総裁の公職に、聖職者のごとく真剣に取り組んだ」という。

第2は、ペロン政権がクーデターで倒れた後、アルゼンチン経済再建のためのプレビッシュ報告を執筆した時であり、ECLAC事務局では、この時、詳細なアルゼンチン経済に関する研究が行なわれた。

第3は、マルビーナス戦争後の民政移管で発足したアルフォンシン政権のもとでの、同大統領の顧問としての活動であった。その直後にお会いする機会があったが、その時「アルゼンチン経済は現在かってない困難な状況にある。私は、自由な立場から発言させてもらうために、一切の謝礼も地位も受けないこととした」と言っておられた。アルゼンチンの新聞にプレビッシュ博士の意見がしばしば載った時期であった。

かつて経済大臣も務めたこともある著名なアルゼンチンのエコノミストによれば、プレビッシュ

博士がアルフォンシン大統領に対して行なった最も大きな貢献は、1984年10月、『ラ・ナシオン』紙に2回にわたって掲載した記事で、グリンスパン経済大臣（当時）の政策を批判したことであったと言う。プレビッシュ博士は思いきったインフレ抑制策をとるべきことを主張したのである。アルフォンシン大統領は1985年に入ってグリンスパン氏を更迭して、スルイール氏を経済大臣に任命し、同氏によって、6月にアウストラル・プランが実施され、インフレ抑制に成功したことはわれわれの記憶に新しい。このことに関連してプレビッシュ博士は、3カ月後の大来佐武郎氏との会談のなかで、「自分はやや性急であった。時間をかけて、着実にアウストラル・プランの実施までもっていったアルフォンシン大統領は、政治家として実にすぐれた人だ」と語っている。

プレビッシュ博士の最後の著書は、アルゼンチン経済に関するものとなった。その題名は、(*Frustración del desarrollo argentino*) であり、近く刊行の予定となっている。この本は4月はじめに、書きあげたとのことであったが、その後も読みかえして書きなおし、逝去される前夜も原稿の

最後の部分の書きなおしをされていたと追悼演説は伝えている。アドルフォ・グリエリ氏によれば、最後の部分には次のように書かれているという。「アルゼンチンは、歴史上きわめて困難な時にある。そして、今何が行なわれるかが、長い間にわたる将来を決めることとなるであろう。そこで国民的コンセンサスをつくりあげなければならない。しかし、何をコンセンサスの基礎とすべきであろうか。ここにこそわれわれの大きな責任がある。明瞭で、革新的でなければならず、かつ倫理感にもとづいて行動するという責任なのである。しかし、それだけでは十分ではない。厳に合理的である必要がある。発展を推進するための合理性と、その成果の分配における平等さとが必要であり、しかもそれら全てを断固たる自律性のもとで実現しなければならない」。

アドルフォ・グリエリ氏は、この一節を引用したあと、次のように結んだ。「師よ、あなたは最後まで戦った。われわれがそれを引き継ごう。ご冥福を祈る」。

(ほその・あきお／筑波大学助教授；中南米総合研究プロジェクト研究会・委員)